

# LSC NEWS LETTER

Learning Support Center 広島修道大学  
学習支援センター

## 2019 No.28

広島修道大学  
Hiroshima Shudo University

### Contents

「修大基礎講座」の新たな試み … 1 長期的な展望に立った初年次教育 … 2  
第33回&第34回 初年次教育セミナー … 4 第10回教育力アップセミナー … 6 LSC資料紹介 … 7  
＜学び★サブリ＞吉野作造と試験成功法・新しいみかた（見方・味方）の広がる場・対話から気づく（築く）まなびの場 … 8

## 「修大基礎講座」の新たな試み



○ 学習支援センター長  
森河 亮

2019年度の「修大基礎講座」は大きな支障もなく、無事、終わることができました。これも一重にご尽力いただいた多くの教職員の皆様のおかげです。この場をお借りしてお礼申し上げます、誠にありがとうございました。

➤ の「修大基礎講座」の授業内容ですが、当然ながら  
➤ 毎年その年度のふりかえりを行い、微妙に変化する学生層、文科省からの要請、本学の諸事情などと照らし合わせながら修正を行っています。今年度の授業内容は、キャリアセンター担当回を1回から2回に増やしました。キャリアセンター担当回では、すべての新生が入塾するPROGというジェネリックスキルを測定するテストの解説を中心に、その結果を学生自身で分析して将来設計を考える内容としていますが、90分では時間が足りず消化不良を起こしている、という理由からです。2回に増える代わりに、どこかを縮小する必要があります。そのため、昨年度は総合企画課とひろみらセンターとの合同での90分、学生センター単独での90分としていた内容を、今年度は3部局合同で90分の内容に改めました。それぞれの部局で、学生に学ばせなければならない学習内容を最小限に絞り、毛色の異なるそれぞれの学習内容のつながりを考え、一つのストーリーをもたせた内容に仕上げました。加えて、年度初めの繁忙期に13学科すべての授業に3部局からそれぞれ職員が講師役として教壇に立つと、それぞれの部局の業務が滞る懸念があるため、講師役は一人で対応するようにしました。これに関しては、他部局の学習内容を自身の言葉として学生に伝えられるよう落とし込みをする必要があるため、担当された職員の皆さんの努力は相当なものだったことと拝察します。一方で、この努力を行うことによって、

各部局が担当する授業は平均で4回となり、マンパワー的な負担は軽減されることとなります。

さて、上述の修正を行った結果ですが、増えたキャリアセンター担当回の学生アンケート結果は、1回目4.58（5点満点で評価）となり、昨年度の4.49を約0.1ポイント上回りました。2回目は4.57と、初めて行った授業としては、とても良い数値ではないかと感じています。PROGの結果を分析し、自身の強みと弱みを見出し、それらを伸ばす・克服するための行動目標を立てる、という内容を駆け足で行っていた昨年度とは異なり、これらを十分な時間をかけて丁寧に学習することによる好影響といえるでしょう。ただし、来年度に向けてさらなる修正が必要だと感じています。他部局と重複する内容や大学での経験がほとんどない1年生の5月の状況では関連付けにくい内容が含まれているため、それらを中心に改善を行う予定です。

3部局合同で行った「修大の歴史と成長サポート体制—成長するための留意事項—」の授業アンケートの結果は4.40でした。昨年度の総合企画課とひろみらセンター合同授業の結果および学生センターの授業の結果は、それぞれ4.38と4.67でしたので、「成功」とは言えない結果だと思います。要因としては、学習内容が多すぎて一方的に伝達する手法に頼り、ワークが少なく受講生の集中力の維持が難しかったことではないかと考えています。一方で、講師を担当した職員の方々とふりかえりでは、「授業担当回が少なくマンパワー的メリットが大きい」「教員の苦勞が分かる」「他部局のことを理解する機会になる」「職員のSDになる」など、好意的な意見が多く聞かれました。

➤ れからも、より良い授業になるよう改善を重ねてま  
➤ りますが、来年度の「修大基礎講座」も多くの教職員の力をお借りしなければなりません。皆様、ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

# 長期的な展望に立った初年次教育

## — 附属校との中高大連携 —

学習アドバイザー 齊藤 幸一

### 1、附属校との中高大連携

現在、広島修道大学は、広島修道大学ひろしま協創中学校・高等学校と「中高大連携教育」を多面的に展開しています。例えば、国際センターによる「グローバル教育」、ひろしま未来協創センターによる「地域イノベーション教育」や「地域つながるプロジェクト」を推進し、留学生や地域の多様な人材との交流などが行われています。そのよ

うに連携し、ひろしま協創が目指す「グローバル・イノベーション・リーダー」の育成に与することは、将来、協創の生徒たちに、さまざまな場面で、学びを深めるリーダーとして活躍してもらいたいという期待があります。

今回、中高大連携教育の一環として、学習支援センターによる「探究科」の特別研修についてご紹介いたします。



ひろしま協創が目指す教育

### 2、高大連携事業高校探究科について



広島修道大学ひろしま協創  
中学校・高等学校  
協創教育部長 吉川 将弘

皆さまご存じのように、現在日本の中等教育は大きな転換期を迎えています。詳細はここでは述べませんが、その大きなものの一つ

は探究学習の重視だと思えます。

本校では2017年度から、プログレスコースをのぞく1年生を対象に「課題研究」という授業を開始しました（2・3年次からはクロスキャンパスコースの生徒のみを対象）。

これは、広島修道大学への新しい附属校推薦が求める多様な評価に対応するとともに、新学習指導要領の求める「探究」する力に対応しようとするものでした。その後、本校は「広島修道大学ひろしま協創中学校・高等学校」と校名変更し、男女共学の学校となりました。それに伴い、「課題研究」を発展的に解消し、新たな形で全校的に探究学習を進めていくことになりました。

教科として「探究科」を設定、教科主任を配置し、担当教員が定期的に打ち合わせを行いながら、現在は高校1年生に2単位の授業を展開しています。

様々な形で、論題の立て方や調査・研究方法などについて体験的に学ぶ活動を行っているのですが、本校には広島修道大学の附属校として、大学の豊かな教育資源を活用できるというメリットがあります。

「探究」の授業でもぜひそのような機会を設けたいと考え、相談したところ、学習支援センターにご講演&ワーク

ショップをお引き受けいただけることになりました。

講演は高校1年生を2つのグループに分け、2回実施いたしました。9月6日(金)と9月10日(火)、会場は本校第1体育館です。

全体の進行は次のように進められました。(実際にはその日の状況に応じて変更がありました)

- 1 問いを作ること及び問いのレベルについてのレクチャー
- 2 「桃太郎」をテーマにした問いの作成+問いのブラッシュアップ+共有
- 3 クラスを越えたグループ作り
- 4 「貧困」をテーマにした問いの作成+問いのブラッシュアップ+共有

9月とは言え、第一体育館はまだまだ暑かったのですが、生徒は様々な活動に取り組みました。特に、「桃太郎」をテーマにした問い立てには楽しそうに取り組んでしました。

もちろん、「問いを立てる」ことは生徒にとって（大人にとっても、ですが）難しいことです。1回の経験でできるようになるものではありません。

現在「探究」の授業は「問い」を立てる段階に進んでいます。一定のテーマの限定の下、マインドマップを用いて自己省察し、自分の興味とテーマを結び付けながら問いを立て、そののちそれを磨いていくことになります。1年次の学びは2年次の研修旅行への学びへとつながっています。また、これからは「探究」をどのように教科学習や課外活動などに結び付けていくかが課題です。

学習支援センターの皆様には、ご講演を快くお引き受けいただき、ありがとうございました。来年度以降も、ぜひ実施していきたいと思っています。

### 3、探究科特別研修「問いを立てる・磨く」

2019年9月6日(金)、10日(火)それぞれの6、7限に、高校1年生を対象に、各日4クラスずつに分かれ、学習支援センターによる探究科特別研修を実施しました。



「問いを立てる・磨く」をテーマに、センター長、学習アドバイザーの計4名が担当しました。今回の目的は、探究科プログラムの高校1年次の目標である「課題発見」のヒントとして、学問の要である「問い」について学び、自ら問いを立て、磨き上げることを体験することでした。

まず、「問い」とは何か、問いを立てる意義、着想について学びました。次に、問いの立て方の練習として昔話「桃太郎」をテーマに配られた用紙に各自「問い」をできるだけ多く記入していきました。「桃太郎はなぜ切られずにすんだのか?」「猿と犬とキジで鬼と戦えるのか?」「鬼は悪いことをしたのか?」など様々な「問い」が出てきました。

そして、出てきた「問い」を各自で4つのレベルに振り分けていきました。レベル1は事実・定義・基本情報を求める問い、レベル2は分析を求める問い、レベル3は仮説・予想を求める問い、レベル4は評価・意見を求める問いです。レベル1からレベル4になるにつれて高度な問いとなっています。このようにレベルに振り分けることで、問いを分析し、よりよい問いを見つけるためのヒントとなります。

桃太郎による「問い」練習を終え、「問い」を立てる本番のワークをしました。SDGsで取り上げられている「貧困」をテーマに、練習と同じように「問い」を立てて、振

り分けていきました。その後、身体を動かすアイスブレイクとグループ分けを行いました。今回は、よく話し合う友達同士ではなく、クラスも違う男女混合の4~5人のグループを作りました。そして、さきほど貧困をテーマに各自で立てた「問い」についてグループで共有し、「よい問い」を検討して1つ選びました。緊張している生徒もいましたが、初めて話す同級生との話し合いは、自分ではなかなか出ないアイデアがあり、新しい発見と刺激が多かったです。最後に自発的にグループで決めた「よい問い」を発表し合いました。あるグループでは、「貧困とは、お金を持っている人と持っていない人との相対的な関係により生まれると考えるので、絶対的な貧困は存在しないのではないか?」という問いを立てていました。

このように、今回の特別研修では、課題発見につながるように「問いを立てる・磨く」ことを実践してきました。よい問いを見つけるためには、「問い」をたくさん出し、それらを分析し、レベル毎に振り分け、そしてグループで検討することを体験していきました。



### 4、参加した生徒たちの声

ここでは、当日参加した生徒たちの感想を紹介します。

- ▶「ひとつのクラスを超えて意見を交流することができた。普段他クラスとの交流をすることが少ない。そのため、クラスを超えてグループを作ることで、意見の幅や価値観を広げることができたので私にとって良い機会だったと思う。」
- ▶「桃太郎についてこんなに考えた事なかったなと思いました。いろんな人の意見を聞いたりして面白かったです。」
- ▶「今まで『問い』というものに種類があるということを知らなかったで、すごく興味を持ちました。レベルごとに『問い』が難しくなっていくのがよくわかり、また自分たちが作ったものがどれに当てはまるかを考えるのが面白かったです。」
- ▶「誰かの意見を聞くだけでなく、自分で考え意見を言う

ことに意味があるのだと思ったのでどんな勉強も先に考えようと思った。」

以上のように「問いを立て・磨く」体験を通じて、自ら考える姿勢や話し合いの重要性を感じ、また「問い」そのものへの理解を深めるきっかけになったようでした。



## 初年次教育セミナー

## 第33回&amp;第34回 初年次教育セミナー

学習支援センター次長 新本 寛之

**学**習支援センターでは、教職員を対象に初年次教育に係るスキルアップを目的として、年2回「初年次教育セミナー」を企画しています。2019年度は「学生の思考をうながすために」と題し、第1回セミナー（通算33回目）を6月19日（水）に、第2回セミナー（通算34回目）を10月16日（水）に開催しました。講師として、両日とも大阪成蹊大学マネジメント学部准教授の成瀬尚志先生をお招きしました。全国からご講演依頼があるお忙しい中、2回連続で快くお引き受けいただき感謝いたします。

**第**1回のテーマは「学生の思考をうながすためのレポート課題の設計」でした。悩ましいコピーレポート対策として、それが生まれる背景を確認し、学生がインターネットを活用することを前提とした上で、それでもなお学生の思考を求めるようなレポート論題の設計について検討しました。グループワークも織り交ぜられ、和やかな雰囲気の中でセミナーは展開しました。

まず、コピーペが生まれる背景ですが、成瀬先生は学生の学力の問題ではなく、レポートの論題が「あいまい」であるがゆえに、学生が何をしたいかわからないという点を指摘されました。「あいまい」にしないためには、論題設計時にレポート課題で評価すべき点や身につけてほしい点などがきちんと考えられているか。それが、学生と共有されているかがポイントとのことでした。

では、具体的に教職員は何をすべきか。その答えとして、素材（テキスト、ノート、インターネット）をベースにした論題設計を挙げられました。素材として、インターネットがテキスト、ノートと並列で語られていることに衝撃を受けました。情報の信憑性は別問題として、学生にとってインターネットは身近な存在であることをまずは認めるということです。その上で、学生に創意工夫を求める仕掛けを設計します。つまり、食材（＝素材）をもとに、教職員が求める料理（＝評価すべき点）を、学生が考案したオリジナルレシピで作ってもらうための仕掛けです。この仕掛け次第で、学生は思考をフル活動することによりオリジナルレシピが開発され、美味しい料理ができるということです。

**学**生の思考を促すカギとなるその仕掛けについて、成瀬先生は1. 指定した出力形式に対応できているか、2. 指定した素材に対応できているか、3. 指定した素材が追加されているかの3つに分類して説明されました。その中で、上記3で紹介された「before-after型」はすぐに活用できそうです。授業を受ける前と後での理解の変化についての記述を求めるというものです。学生は自分

自身の思考の変化をたどることになるので、引用では対応できず思考をフル活動せざるを得ません。まずは、授業直後のミニッツペーパーで早速活用してみたいと思います。

**続**いて、第2回セミナーは「プロジェクト型学習（PBL）におけるお題設定について考える－課題解決アプローチとソーシャルアクションアプローチの検討－」というテーマで展開しました。PBLは社会的な課題解決アプローチが一般的ですが、成瀬先生はオルタナティブとして創出型アプローチを提示されました。課題解決アプローチが「マイナス（＝問題）からゼロ（プラス）」へ向かうのに対して、創出型アプローチは特に問題はなく、困っている人がいるわけでもなく、つまり「ゼロ（＝問題なし）からプラス」へ向かうアクションであると説明されました。そのアクションの事例として、他者と共に社会課題に向けてなされる「ソーシャルアクション」を紹介されました。近年では、「シャルソン（ソーシャルマラソンの略）」という活動が全国的に実施されているそうです。

また、創出型アプローチは「成果物の社会的意義にこだわり過ぎない」という点で、課題解決アプローチと特徴を異にします。成果以上に、取り組みのプロセスを重視することなので、教員としてPBL導入のハードルが低くなる印象です。

そのプロセスにおいて、個人的に関心を持ったのは参加学生の主体性をより強調された点です。教員が介入しすぎると学生の主体性が削がれてしまう、一方で放置すると膠着してしまうという、さじ加減の難しさを実感するところです。私が担当する前期PBL型授業のグループワークで、膠着しているグループがありました。課外でも熱心にメンバーが集まって議論しておりました。最初の2回ほど私もその議論に介入しました。ところが、軌道に乗り始めた3回目から「先生、もう参加されなくて大丈夫です！」とリーダーにきっぱり言われました。ちょっと寂しい思いをしつつ離脱したのを覚えています。

しかしながら、このたびの成瀬先生のお話を聴いて、あの離脱の瞬間こそが、学生たちにとって主体性発揮の出発点になったのだと、1人ふりかえりをさせていただいた次第です。

**成**瀬先生ご担当によるセミナーを2連続で企画・参加し、最新の専門知識吸収とともに、自身の授業について自己点検する良い機会となりました。参加された本学教職員の皆様にとりましても、アンケート結果からたくさんの有益な発見を得る機会になったことが推察されます。むすびに、成瀬先生に重ねてお礼申し上げます。

## 第33回・第34回 初年次教育セミナー 参加報告

参加者  
からの声

人間環境学部准教授 松川 太一



成瀬尚志先生による初年次教育セミナーのテーマは、第33回がレポート、第34回がプロジェクト型学習（PBL）だった。学生が良いレポート、良いプロジェクトを生み出すことができない大きな要因は、教員の「お題設定」のまずさにあると考えるのが、両セミナー

に共通するスタート地点である。まずい「お題」の例として、レポートであれば論証型レポート、PBLであれば課題解決アプローチをあげる。論証型レポートは剽窃を招きやすく、課題解決アプローチは学生による主体的な取り組みが難しくなる。

では、良いレポート、良いプロジェクトを生み出す「お題」はどのようなものか。レポートについては、すでに著書にまとめられているので省略する（成瀬尚志編、2016、『学生を思考にいざなうレポート課題』ひつじ書房）。

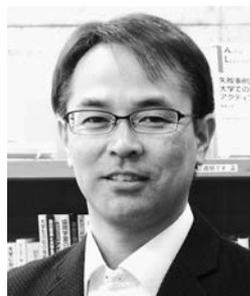
PBLについては、「他者ととともに社会課題に向けてなされるアクション」を教員が事前に設定することを推奨する。それをソーシャルアクションアプローチと名づけ、シャルソン、おもいやりライト等の事例が紹介された。アクションを事前に設定することで、学生のやるべきことが明確になり、学生の主体的な取り組みが生まれやすくなる。私がソーシャルアクションアプローチを初めて耳にした2015年2月の京都光華女子大学でのフォーラム時はよく理解できなかったが、それから4年が過ぎた今回のセミナーであらためて話を聞くことによって理解できた気がする。

成瀬先生の「お題設定」研究は、学部教育において何をあきらめるべきかを問いかけている。レポートについて、私は学术论文を想定した論証型レポートを求めることをあきらめることができる（このあきらめは悲観的なものではなく、まずい「お題」の回避である）。一方でPBLについて、私は学生自身がアクションを生み出すことをなかなかあきらめられない。セミナーでは、学生たちが創意工夫によってアクションを生み出した国際交流サロンプロジェクトの事例が紹介された。学生がアクションを考えるPBLは難しいので「今ならやらない」と成瀬先生はふりかえっていたが、私にはそのプロジェクトが最も魅力的にみえた。アクションを事前に設定しないPBLが失敗しがちなのは確かである。しかし、学生がアクションを生み出せなかった失敗も含めてPBLだと私は考えているのかもしれない。

## 第34回 初年次教育セミナー 参加報告

参加者  
からの声

商学部准教授 玉繁 克明



本セミナーは、「プロジェクト型学習（PBL）におけるお題設定について考える（大阪成蹊大学成瀬尚志准教授）」というテーマで実施され、PBLによる創出型アプローチの事例としてソーシャルアクションが紹介された。ソーシャルアクションは、「社会課題

に他者ととともに取り組み、交流することや偶然の出会いの楽しさを実感できる良さがある」とし、主体性、協働性、社会性等を育成する場の好事例として紹介された。

私は、高校教育を中心に、高大の学びの系統性について研究している。本セミナーには、初等中等教育で実践される課題発見・解決学習と大学教育で実践されるPBLの違いは何か、高大の系統的な学びとはどうあるべきかについて課題意識をもって参加した。

初等中等教育では、児童生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けて、課題発見・解決学習が推奨され、地元団体と連携した課題解決型の学びが注目視されている。

本セミナーに参加したことで、大学でのPBLとは、高い専門性（コンテンツ）を生かし、幅広い人間性や汎用的な資質・能力（コンピテンシー）を育成することにあるのではないかと結論付けた。

高大の系統的な学びについては、学習者の発達段階の違いが鍵になると考える。青年中期（高校）段階は、特定の仲間の集団の中では濃密な人間関係を持つが、集団の外の人に対しては無関心になりがちな傾向があるとされている。成瀬氏は、大学生には、親密圏外との出会いがワクワク感につながったり、多様な人から承認を得られることが充実感につながったりすることが学びのやりがいになる側面を持っているとし、創出型アプローチのPBLの良さでもあると述べている。このことに着目すると、大学教育では、より積極的に学外とつながり、専門性を生かした学びの場を設定することで、幅広い人間性や汎用的な資質・能力の育成につながる学びが実現できると考える。

一方、高校教育においては、学外との連携事業を行うことが目的化されると、本来の学びの目的が達成されない可能性が出てくる。そこで、学習者にどのような問いを投げかけ、どう思考させたいかを授業者が熟考し、実践的・体験的な学びの工夫を行うことで、汎用的な資質・能力の育成につなげていくことが重要であると考えます。

第10回

## 教育力アップセミナー

参加者  
からの声

経済科学部助教 塗師本 彩

今年の4月より広島修道大学に専任教員として赴任し、日々授業を担当する中で、授業の難易度の設定や授業の運営方法など教育上の課題が多々あると感じていた。この度教育力アップセミナーへの参加は、そういった教育を行う上

で課題と感じていることを参加者と共有・検証することで、今後の授業への取り組み方や学生との関わり方を考え直すよい機会となった。

具体的には、参加者とのグループワークを通じて講義形式の授業運営について考えを深めることができた。私が参加したグループでは、講義形式の授業でどうすれば学生の関心を維持できるか、やる気のない学生にどう対応すればよいかといったことに課題意識を持って話し合った。様々な意見が出る中で、この授業を学ばばどこに行きつくのかというロードマップの提示と、将来どう役立つのかという動機付けの部分が特に重要であるという結論が出た。また、人数が多くなると全員に気を配ることが難しくなる分、少人数の授業で丁寧な指導をすることが大講義での学生の取り組みにもよい影響を与えるのではないかという意見もでた。様々な人の様々な意見を聞くことで考えが深まったように思う。その他、グループワークを中心とした今回のセミナーでは、いくつか異なる形態のグループワークを体感することができた。授業の目的や授業の規模・学生の雰囲気等に応じて適切な方法を選択できればより効果的な学びの場を提供できるように思った。また、グループワークを通じて普段はなかなか関わる機会のない先生方や職員の方と意見を交換することができた点も有意義だった。

このセミナーで得た学びや気づきを念頭に、今後教育力を高めていけるよう日々の授業に取り組むたい。



教学センター 寺島 幸一郎

2019年8月30日(金)に開催された、第10回教育力アップセミナーに参加しました。対象者は在職1～4年目の教職員が中心で、「より効率的な教育のために」をテーマとし、研修の目的としては

(1)大学での教育活動における課題を検証すること (2)教員と職員で互いの問題を共有しながら、改善のための方法をともに探ること の2点でした。

変化していく社会情勢の中で、大学が置かれる環境は徐々に厳しくなっています。その中で「質保証」という言葉がキーワードとなりますが、具体的な授業手法の改善策となるアクティブラーニングについて、ディスカッションを行いました。

学び方には4つのスタイル(①見たり聞いたり読んだりして学ぶ ②じっくり考えることで学ぶ ③動いたり実際に試すことで学ぶ ④フィーリングや感情、直感などを大切にすることで学ぶ)があり、全てのスタイルの方法で効率的に学生へアプローチできるのがアクティブラーニングです。

ディスカッションでは席を移動し、教職員が入り混じりながら様々な組み合わせで行うことで、教員目線、職員目線の多くの意見を交わすことができました。また、以前勤務していた他大学や他企業での経験を活かした鋭い見解が多く、充実した研修となりました。具体的な意見としては、「アクティブラーニングは教育効果を高めることが期待できる一方、評価指標の設定が難しい。」「大人数が履修する科目では教員の負担が大きい。」「授業についていけない学生へのサポートが必要。」など、改善課題も多く挙げられました。また、研修中に行ったディスカッションの方法そのものが、アクティブラーニングの手法を取り入れたものであり、アクティブラーニングの重要性を肌で感じることができました。学習支援センターの皆様、参加者の皆様、この度は貴重な機会をいただきありがとうございました。



# LSC資料紹介

学習アドバイザー 松村 一徳

学習支援センターでは、大学教育、初年次教育、アクティブラーニングや授業手法などに関する図書を収集しています。貸出もおこなっていますので、気軽に学習支援センター（協創館1階）までお問い合わせください。

近年、探究型の学びが広がっています。先の頁で紹介したひろしま協創中学・高校の「探究科」のほか、大学でも学生が自ら問いを立てて課題解決へ取り組むPBLなどの授業が導入されてきています。「主体的・対話的で深い学び」の一つのかたちとして期待されます。今回のLSC資料紹介では、探究型の授業づくりの助けとなる2冊を紹介します。

## 『学びの技 14歳からの探究・論文・プレゼンテーション』

後藤 芳文, 伊藤 史織, 登本 洋子 / 玉川大学出版部(2014年)

本書は、3名の玉川学園教諭が自ら、玉川学園中学3年生の必修授業「学びの技」をまとめたものです。探究型の授業が必要な理由や、探究に欠かせない問いの立て方、資料調査の仕方、発表の方法、論文の書き方など、授業設計の詳細が分かります。中学3年の授業ですが大学生の学びの形と遜色なく、本当に中学生がこのような学びをやっているのかと驚きに値します。中学生の授業だと思って甘く見るべきではありません。「14歳からの」とタイトルにもあるように、本書の内容は大学の授業でもそのまま応用可能です。学習支援センターで受ける学習相談では、レポートの書き方や発表の仕方に関するものが多くなっていることから、特に、論文の書き方やプレゼンの仕方に関する章は修大生に必要なかつ有用だと思われます。探究型の授業設計について具体的に知りたい教員には、大変手助けとなる一冊でしょう。



## 『たった一つを変えるだけ クラスも教師も自立する「質問づくり」』

ダン・ロススタイン, ルース・サンタナ, 吉田 新一郎(訳) / 新評論(2015年)

『学びの技』の書評でも書いたように、探究にまず欠かせないのが「問い」です。玉川学園でも、まず問いをどのように立てるかを重視して授業をつくっているようです。しかし、問いを立てるといのは意外に難しいことで、さらに、それをどのように授業に組み込んでいくのかについて指南してくれる本はなかなか見つかりません。

本書はアメリカでの実践をもとに書かれたものです。アメリカのあるクラスで、どのような問いをどのように立て、それをどのように授業に組み込み、クラス、生徒、教師がどのように変わっていったのがまとめられています。タイトルにある「質問づくり」とは「問いを立てる」とこと同義と見て良いでしょう。問いを立てることから探究型の授業へどのように昇華させていくのか、指南役となる本だと思われます。



上記2冊の本で書かれていることは、伝統的に日本の学校教育で行われてきた授業の在り様とは大きく異なり、違和感を覚える場合も少なくないでしょう。また、教育において「学ぶ」ことが善で、「教える」ことは悪であるという極端な二元論的な風潮を懸念する教育哲学者もいます。まずは様々な教育の形があることを知り、今後の教育の在り様を発展的に考える材料として、これらの本に目を通して見るのはいかがでしょうか。

## &lt;学び★サプリ&gt;

2019 Vol.16

## 吉野作造と試験成功法

学習アドバイザー 是澤 克哉

師走を迎え、そろそろ定期試験が気になる時期になりました。どうすれば、試験で良い成績を修めることができるのか。これは学生の永遠の課題です。実は、明治時代の学生たちも同様に悩まされていました。当時、とても流行した本が、吉野作造（1878-1933）が著した「如何にせば試験に成功するか」です。今回は、吉野の「試験成功法」について取り上げたいと思います。

大正デモクラシーの代表的な思想家として知られる吉野は、帝国大学を首席で卒業するほど大変な秀才でした。彼が生涯払った授業料は、父親が尋常小学校に入れるために用意した一升瓶一本だけという逸話があるほどです。そんな吉野は試験の準備を、「理解」と「発表」に分けて考えるべきだと主張します。理解のためには、「後に読んで覚えんとするときに、便利なるように、筆記して置かねばならぬ」とノートの再現性を強調しています。また、教科書は、要点を掴むことが何より大切だと指摘します。試験では、教師が10時間かけて口述した内容を1時間で答えねばならないため、自らが読んだ内容に見出しをつけるなど、要約の練習が役立つと述べています。

発表においては、採点者を意識し、「正しく、楽に、面白く」読めるように答案を工夫すべきだと説きます。試験官は一度に多くを採点しなければならず、答案は余計な文字を省き、必要最小限の字数で書くべきだと書かれています。しかも、惹きつける文章が大切で、話の順序と文章の面白さに気を配るべきだとも。しかし、面白さを追求すると、話が誇張されるため、まずは正確に書くべしと結論付けています。

このように読んでみると、彼の試験成功法は現代でも通じる内容が多いことに驚きます。特に、文献の要約と採点者を意識した答案を書くことは、マークシートに慣れた学生たちに持って欲しい視点です。そして最後は、「結局は自分で工夫しなければ成功は望めない」と、自律的な学習態度を求めて筆を置くあたりもさすがです。試験準備にお悩みの学生たちは、彼の学習法をひとつ取り入れてみてはいかがでしょうか。



<学び★サプリ>は学習支援センター掲示板で読むことができます。

## 新しいみかた（見方・味方）の広がる場



竹元 美雪（人文学部人間関係学科4年）

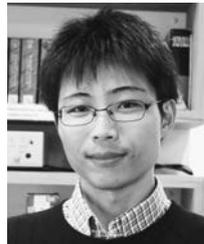
公務員試験の小論文対策の際に利用させて頂きました。

小論文の知識がゼロのまま学習支援センターに行きましたが、基礎から徹底的に教わることができ心強かったです。

それ以降も具体的なアドバイスのもと効率的に学習できました。特に、採点者側の視点を知ることによって、自分なりに改善点を見つけられるようになったのは大きな収穫でした。その課題克服にむけて小論文を書き、レベルアップしている感覚を持ちながら対策を進められました。

また、学習アドバイザーの提案で、同時期に教採の小論文対策をしていた人と一緒に対策を行えました。違う分野を目指す人と対策を行うことで、小論文を書く際の考え方を広げられ、そして何より共に頑張る同志に出会えたことは有り難い機会でした。その結果、本番を安心して迎えられ合格を掴み取れました。お世話になりました。

## 対話から気づく（築く）まなびの場



楠 啓史（人文学部英語英文学科1年）

学習支援センターを利用して、私は大学で必要な知識や技能を学ぶことができました。レポートの書き方やプレゼンの仕方なども学びましたが、特にワークショップのTOEIC（L&R）

対策講座のおかげでスコアを大きく伸ばすことができました。入学時に受けたTOEICでは何も対策をしていなかったため、平均以下の385点でした。しかし、問題の傾向、解くときのポイントやテクニック、問題ごとの時間配分、勉強法などをアドバイザーの方に教えてもらい、毎週木曜日の昼休みにあるTOEIC対策のスタディグループに出ながら勉強した結果、夏に730点を取ることができました。学習アドバイザーと気軽に相談しながら、継続的に勉強できたことが、私にとって大きな助けになりました。今後も学習支援センターを利用しながらスコアを伸ばしていきたいです。



Hiroshima Shudo University

Learning Support Center  
**LSC NEWS LETTER**  
広島修道大学  
Hiroshima Shudo University

発行日 2019年12月25日

発行者 広島修道大学学習支援センター

〒731-3195 広島市安佐南区大塚東1-1-1 TEL.(082)830-1426

E-mail skill@js.shudo-u.ac.jp

©LSC NEWS LETTER はホームページでもご覧になれます。